

幼子とともに

2024 年度 5月号

はじめに

季節外れの夏日が続くと思いきや、突然、冷たい雨が降るなど、寒暖差の激しい今日この頃、子どもたちにとっても、体温調整しにくい、かつ体に負荷がかかりやすい天候とも言えるかもしれません。ご家庭におかれましても、子どもたちの様子を、いつもより気を付けてみて頂ければと思います。

5月は、新緑が豊かな時期でもあります。青々とキレイな葉っぱやそれらに群がる虫たちが元気に登場します。子どもたちにとっても、豊かな自然に触れるチャンスです。雨が多いのが気にはなりますが、一日でも多く、子どもたちが元気に外に出て、伸び伸びと自然に触れ、心癒される日々を過ごせたらと思っています。

もも組が始まりました！！

今月から、未就園児クラス「もも組」が始まりました。初日は、雨模様という事もあり、もも組のお部屋で、保護者の方々と過ごす形となりましたが、今後は、幼稚園のホールや園庭で遊ぶこともあるだろうと思います。子どもたちには、幼稚園という新しい世界を楽しんでもらいたいと思いますし、保護者の方々には、越谷幼稚園の自由な雰囲気を知ってもらえたら幸いです。

今までは、保護者と一緒に満喫してきた子どもたちは、次に、新しいお部屋で、新しいお友だち、新しいおもちゃや先生と出会い、更に世界を広げていくことになることでしょう。そして、「みんなと一緒に」「一緒に遊ぶ」ということを通して、安心や喜びを感じながら、幼稚園での生活を過ごしてほしいと思っています。

園長のいたずら

ある男の子が、園長のもとにかけより、「見て。見て。丸いのあるよ。丸いのあるよ。」と言いながら、そっと、自分の手のひらを開けました。そこにいたのは、きれいに丸まった、きれいな色の小さなゲジゲジでした……。そうきたか、……」

すかさず、「わぁ、きれいな色だね。よく触れるねえ〜。先生は触れないよお〜。すごいねえ〜。」と言うと、嬉しそうに、ゲジゲジを虫かごに入れて観察をしていました。いつもなら、こういう時、園長は、次のように言います。「◎◎先生にも見せてあげて、きっと喜ぶよ！」と（勿論、◎◎先生は、虫が苦手であることは調査済みです）。越谷幼稚園の先生には、まだ、こんな、よく言う子どもみだいな「いたずら」はしていませんが、いつか、先生方が忘れた頃にしたいと思っています。

ただ、ここには、とても大切なこともあるのです（いたずらをするものではありませんw）。子どもが「先生見て」と言う時、あるいは、「お母さん、お父さん見て」という時、それをまず見る。受け入れること。苦手なものであれば、苦手としていない子どもを褒めてみる。出来れば、その場で見る（後で見るのではなく）。様々な思いで、作り、摘り、見つけた、その思いを、子どもの目線に立って受け止めておくことが大切です。それが、子どもたちの自信になり、安心になるのです。大人の目線からみて、汚い・気持ち悪いと思えるものでも、子どもの世界では、そう見えていないかもしれません。その子どもの世界が、面白い、楽しい、と少しでも思えるところに、子どもに寄り添える保育、教育、子育ての大切なスタートがあると思うのです。さあさあ、虫が豊かに発生する初夏、園長は、誰よりも先だって園庭にいるように頑張ります！

タップタブ泥水

雨が降り、翌日は晴れ、子どもたちは、裸足になって、園庭で遊んでいます。ある女の子たちのグループが、しきりに、泥をバケツにいれ、水で溶かし、泥を入れ、水で溶かしている場面を見かけました。単純な作業ですが、みんな真剣です。こうすればいいよ。こうしてみようかな。やり方を教えたり、チャレンジしたりもしています。そこで出来たのが、バケツ一杯の「タップ、タブの泥水」です。これ冗談抜きで、「タップ、タ



プ」という感触です。「タップ、タブ」という表現しか生まれないほどの感触です。本当に、ただただ気持ちいい感触の泥水でした。

私も一緒に入って、タップタブ泥水を作ります。なかなか、うまくできていないのを見かねた女子たちが「こうするんだよ」「こうしたらいいよ」と教えてくれます。泥水から手を上げると、「園長の手、泥人間みたい！」と最高のお言葉も頂きました。

土や泥や砂は、それぞれ感触が違いますが、いずれにせよ、自然に触れることは、子どもの内面・外面の健康にもつながる大切な物質です。また、様々な遊びを生み出すきっかけにもなるでしょう。自然が少なくなった時代ではありますが、子どもたちの心に良い刺激となるような自然を生かした保育は、ぜひ、大事にしていただきたいと思うこの頃です。

星野富弘さんのことを読んで

先日、クリスチャン画家・詩人の星野富弘さんが、天に召されました。かつて、体育教師であった星野さんは、授業中に転落し、体が不自由になってしまいました。しかし、星野さんは、筆を口にくわえ、繊細な花の絵を描き始めます。そして、それが、星野さんのライフワークとなりました。彼の描く絵や添えられた詩を通して、教会に行くきっかけをもらった人も少なくはないだろうと思いますし、希望や元気をもらった人も沢山いただろうと思います。

突然の事故・怪我を経験し、体が不自由になってしまう、ということは、計り知れないほどの苦しみや悲しみを背負うことであつただろうと想像します。今までできたことが、できなくなるのは、とても悲しいことでもあります。しかし、星野さんは、その不可能性の多い現実の中で、できることを見出したのだと思うのです。できないばかりに氣を取られるのではなく、むしろ、この苦難を受け入れ、この苦難の中で、神と交わり、自分の存在がそれでも神に受け入れられていることを喜びとし、その喜びの中から、自分にもできることを示されたのだと思うのです。

私たちもまた、様々な苦難を経験することがあります。なぜ、こんなに苦しいのかと、問いたくなる気持ちも生まれます。けれど、実は、この苦難の中で、あなたにしかできないことは何か、あなたに出来ることは何か、と私達は、むしろ問い返されているのかもしれない。苦難の中で、自分の無力さを突き付けられていたとしても、そんな私達を必要としてくれる存在がある。出来る事は少ないかもしれないけれど、そんな些細なことですら、必要だと言ってくれる人がいる。あるいは、それを用いられる神がいる。そういう思考や信仰で生きられるならば、私達は、その重い足を一步一步進めることができるのではないかと思います。

星野富弘さんとそのご家族の上に、神様の平安を、心よりお祈り申し上げます。

園長 須賀 工

栄養士だより

連休中に夫の畑の手伝いに行き、大根の間引きをしました。一か所に2,3粒の種をまき（間引き作業をなくすため、一粒だけまくと発芽しないそうです。）発芽後、少し葉が伸びたころに間引きます。成長が分散しないようにと、間引きは重要な作業なのだとか。土に触れながらのひと時の作業でしたが、多くのことを思いました。土の中で種同士が頑張って発芽しようと話し合いながら次々と発芽します。出てきた大根は赤ちゃん大根です。それを廃棄するのは何とも忍びなく（土の中の大根に託されたように感じ、）白い大根の部分と一緒にす



べて細か切りにしてふりかけにしました。お日様の光と土の中の栄養分をたっぷり吸い取り、これからどんどん成長していくことでしょう。植物も私たちと同じ生命があり、私たちと同じように仲間が必要なんですね。収穫できた野菜たちを愛しみながら、無駄にすることなく調理したいなあと思いました。野菜が育つ風景は多く見ることはできないけれど、野菜など食物の話を食事中にしてみたいかがでしょうか。幼稚園でも子どもたちは時折土に触れます。さつまいもの作付けからお芋ほり、じゃが芋や大根などの収穫を通してその始まりから食べるまでを行い、食物への感謝の思いが芽生えてくれることを願っています。

栄養士 いけだ かずみ